

1975

出雲国分尼寺

古3次発掘調査概報

鳥根県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、昭和50年度におこなった出雲国分尼寺跡（島根県松江市竹久町所在　島根県遺跡番号574番）の第3次発掘調査の概報である。
2. 調査は、近い将来に予想される開発にそなえて遺跡保護対策を立てるための基礎資料を得る目的で、国の補助事業として実施し、本年度が最終年度である。
3. 調査主体

島根県教育委員会

### 調査組織

調査指導 山本 清（島根大学名誉教授）

井上飼介（松徳女学院教頭）

稻田孝司（奈良国立文化財研究所技官）

調査員 島根県教育委員会文化課職員

調査補助員 秀坂真樹、和田正敏、則頭孝治、森 昌義（以上島根大学学生）

### 調査期間

昭和50年8月4日～同年9月4日

4. 本書の編集執筆は、山本清、井上飼介、稻田孝司各先生の御教示を得ながら、調査を担当した県文化課主事横山純大、川原和人があたった。
5. 掘図中の方眼方位（実測方位）は、磁北よりN 5° 57' Wで、図中の矢印方位は、磁北よりN 6° 40' Eの真北をさす。
6. 発掘調査に際して、地主および中竹矢部落の方々には、終始献身的な援助をいただいた。

## 出雲国分尼寺

国分尼寺は、国分寺と共に、741年聖武天皇の詔によって、鎮護国家を目的として全国に造営された寺院であり、当時は『法華滅罪之寺』と呼ばれていた。

出雲国分尼寺は、古くから国分寺の東方約400m、松江市竹矢町中竹矢の通称「寺屋敷」・「法華寺前」の一帯に所在するといわれてきた(表紙参照)。それは、標高35m余りの低丘陵突端部の南麓に位置し、前面には意宇平野が広がる緩斜面にあたり、ほぼ完全に宅地化されている。

昭和47年、意宇平野周辺を中心として、「八雲立つ風土記の丘」が設置されたのに伴い、出雲国分寺は復元整備がなされた。しかし尼寺については、調査も実施しないまま、周囲の宅地化が進行していった。そこで島根県教育委員会では、遺跡保護のための調査を昭和48年度から実施することになったものである。

### 調査の経過

調査は当初2か年計画で実施したのであるが、なお十分な成果を納めるに至らなかつたため、引き続いて今年度も調査を実施し、最終的な結論を出すことになった。



第1図 僧寺および尼寺の位置

#### 第1次調査(昭和48年11月1日～12月5日)

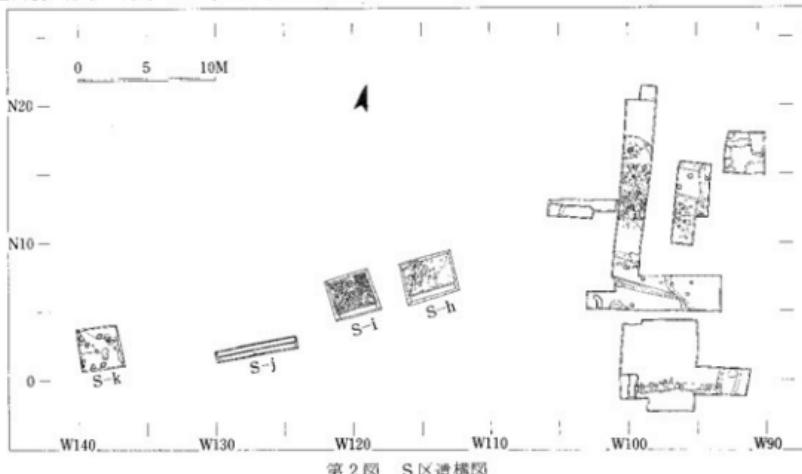
中竹矢集落の東側の水田、畠地を対象に発掘調査を行なった。奈良時代の大溝・築地状の遺構の他に平安時代および中世の建物跡・井戸等を検出し、多数の瓦、須恵器も出土した。丸の中には国分僧寺創建時の軒丸瓦があり、須恵器壙には「東室」「子刀自」等の墨書き器も発見された。

#### 第2次調査(昭和49年11月5日～12月12日)

当初第1次調査によって検出した遺構の性格と、寺城・伽藍の確認を目標として実施した。しかし調査中途において、中竹矢集落南端の松浦歎氏宅の造作地から多数の瓦が出土している事実を知り、緊急に調査した結果、築地状遺構を検出した(T区)ので、急拡中竹矢集落内に調査の主体を移し、T区に統いて上段のS区から建物の基礎部分の積土を確認した。それにより尼寺の中心部の所在の見当はついたものの、寺城・伽藍配圖等についての調査が不十分なため、さらに今年度も調査を続行した次第である。

## 調査の結果

昭和50年度は、昨年度確認した中央の礎石のおかれていた建物の規模を明らかにし、さらに主要伽藍の配置、寺域の確定を目的として実施した。しかし尼寺跡のほとんどが宅地下にあることが明らかになった以上、調査面積は非常な制約をうけ、面より点の調査に終始した。以下今年度調査の結果を述べることにする。



第2図 S区遺構図

### S 区

昨年度検出した中央の礎石のおかれていた建物について、基壇の規模を知るために、西端と推定される付近に設定した。昨年度調査において、南北幅約17.6mを確認したが、東西幅については、東端は完全に削り取られており、西端は宅地の玄関先と推定されるため、調査を見合せていたものである。トレンチは宅地内に4か所(h~kトレンチ)を地形に応じて設定した。

### hトレンチ

南北方向に幅2m、深さ0.3m程度の浅い溝状の落ち込みが認められた。それは、トレンチ最下層の黄色土層に掘込んであり、暗褐色の覆土内からは、多量の瓦片を検出した。瓦はいずれも細片であるが、下部に至るほど多く認められ、その状態は人為的に敷きつめたものとは思われない。黄色土は、その土質から三層以上に分けることが可能だが、版築等は認められず、地山としてよいと思われる。

### iトレンチ

現代盛土の下(現地表下約1m)にhトレンチと同様、暗褐色土が認められ、瓦片、木炭片を多く含む。地山と暗褐色土の間には、茶褐色、暗褐色、暗茶色のうすい層が入っており、いずれもかたくしまり、版築状の堆積をしている。

瓦はトレンチ全面に非常に高い密度で遺存しており、昨年度調査したS-cトレンチの北半部と同様の様相を呈す。また地山面には、北北西～南南東の方向で幅1.2m以上、トレンチ南端での深さ0.45



第3図 S区南壁断面図（トレンチ間隔は任意）

m程度の溝が掘りこんである。溝内には漆黒色土が入り、橙褐色の砂質土がブロック状に混入している。遺物は含まないが、掘込み上端は、暗褐色土層より下であり、時期的には、瓦の堆積より古いものと判断できる。

#### jトレンチ

iトレンチで確認した瓦の散布範囲を確認するために設定したものである。旧耕土の下にh、iトレンチと同様の暗褐色土層を確認したが、瓦は少量を含むにすぎず、径30cm余りのピットを1穴検出した。

#### kトレンチ

瓦を包含していた暗褐色土層は消え、瓦は地山直上層より中世以降の陶磁器と共に数片出土したのみである。地山の起伏が激しく、地山上面は、jトレンチより約70cm高くなっている。

これらの調査結果を総合すると、

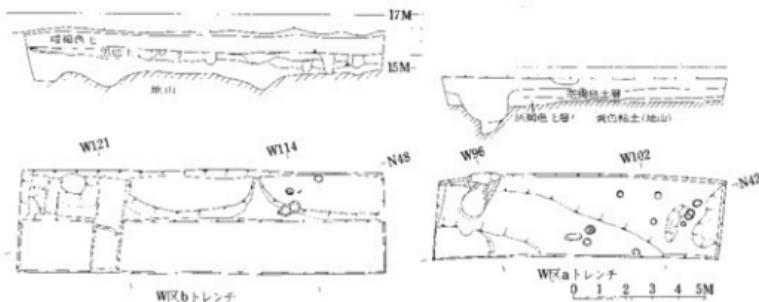
- (1) 瓦片を包含した暗褐色土層は、jトレンチとkトレンチの間で消え、地山面はkトレンチで約70cm上がっている。
- (2) しかし、jトレンチとkトレンチの間を基壇の西端と仮定した場合、東西幅は35m以上を計り、出雲国分寺金堂の東西幅33mより長くなる。基壇幅と建物幅が比例するとは限らないが、この場合建替の可能性も十分考えられる。
- (3) 瓦の量は、iトレンチを最高にして、jトレンチでは激減する。
- (4) 基壇掘込み地業内の版築状の積層は、今年度調査区内では明瞭に確認できず、わずかにiトレンチでその一部らしきものを推定し得るのみである。
- (5) hおよびiトレンチ内で検出した溝状遺構のうちhトレンチについては、それが南北方向に走っており、溝内に瓦片が多量に出土したことから、建物に関係のある遺構の一部と推定される。  
という諸点が指摘できる。いずれにしても、ここに掘込み地業を施した基壇をもつ礎石建物があったことは疑いの余地はないが、その規模、建替え等については、今後の検討に俟たねばならない。

## W区

S区の北、薬師堂周辺の平坦地に設定したもので、中央の礎石建物と一連の伽藍を追求するためである。山道より東をaトレンチ、西をbトレンチとした。

#### aトレンチ

3×11mのトレンチで、薬師堂の境内に設定したものである。地山は北から南へ向ってゆるやかに下



第4図 W区遺構図（トレンチ間隔は任意）

がっており、若干の起伏を生じている。自然の傾斜と思われる。層序は上から、境内整地層、茶褐色土層、灰褐色土層、黄色地山となっており、茶褐色土層には、瓦・陶磁器片を包含する。地山面からは、径30cm、深さ10cm前後のピットが數穴掘りこんであるが、時期、性格等については不明である。

またトレンチ東端で、長径1.6m、深さ2m余りの楕円形の落ち込みを検出した。茶褐色土層から掘り込んであり、内部に五輪塔片を包含する。遺構の性格は不明である。

#### bトレンチ

薬師堂の西、竹籠の中に設けた15×4mのトレンチである。トレンチ断面の観察では、現地表下80cm余りのところに平坦面が認められる。それは表土に続く暗褐色土層の下面にあたり、この面から計6個の落ち込みが検出された。いずれも内部に地山質のブロックが混っているものの不整形である点、柱穴とは即断できない。またこの平坦面下の黒色土層からは、弥生～平安に至る土器、瓦が出土しており、したがって上部の平面は、尼寺創建時の遺構面ではなく平安時代以降のものと思われる。地山は山裾にあたるためか起伏が激しく、深い。また自然堆積による黒褐色土層、淡褐色土層が地山上面に残っている。

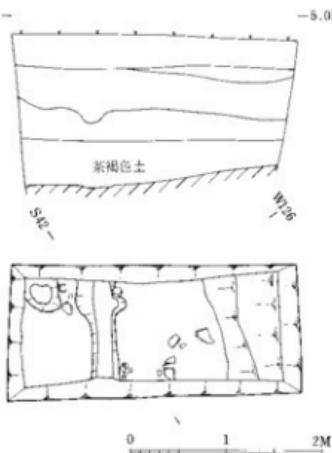
このようにW区において、建物跡の存在を裏づけるに十分な資料を得ることはできなかったが、若干の瓦の出土もあり、仮にあったとしても構造的には簡素なものといわざるを得ない。

#### X区

昨年度T区で検出した築地状遺構の西側への広がり、及び南門の位置をつかむために設定したものである。

#### aトレンチ

地山は南へ向かってゆるやかに傾斜し、上面に暗



第5図 X-b区遺構図

褐色土層が認められるが、内部に現代の瓦片が含まれており、当時の遺物、遺構と断定できるものは全く検出されなかった。

#### bトレンチ

T区築地状遺構の西延長線上にあたる。3×1.5mのトレンチしか設定できなかつたが、瓦片と共に溝状遺構の一部が検出された。瓦は黄色粘土の地山上面から検出し、すべて小片であるが、T区と同様の遺存状況である。溝状遺構は、その位置から築地状遺構の南側溝の部分にあたると推定してよさうである。深さ25cm程度で、壁はゆるやかに傾斜する。よくしまって硬い茶褐色土で埋っており、水が流れた痕跡は認められない。

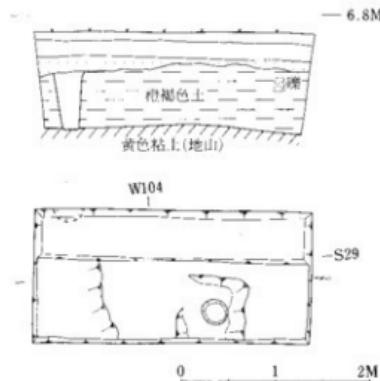
いずれも宅地内に設定したトレンチであるため、十分な調査面積が確保できず、遺構の全貌を把握できなかつたが、昨年度検出したT区築地状遺構が東西方向に延びている可能性があることは否めず、少なくとも寺域の南側を向する何らかの遺構が存在していたと断定してよからう。

#### Y 区

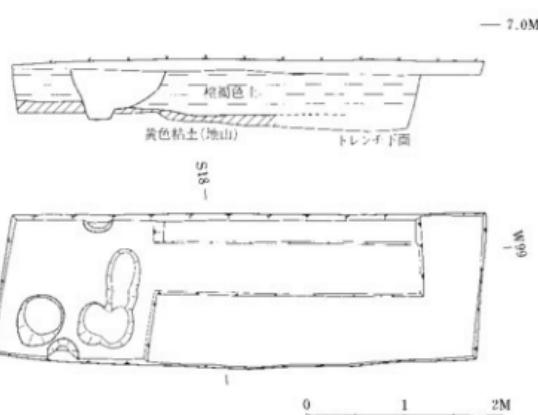
S区で検出した礎石建物以外の伽藍確認のためのトレンチで、S区の南側、推定伽藍中軸線上に設けた。現在S区とは中間を県道によって昭和初期に切られており、標高差2mをはかるが、当初は一連の緩斜面であったらしい。この付近は宅地造成により相当の加工をしているが、その際瓦と共に柱穴も発見したということである。

#### aトレンチ

宅地の裏庭に設けた3×1.5mのトレンチである。現代築地層、旧耕土の下に瓦、土器片を少量含んだ厚さ15cm程度の暗褐色土が入り、褐色土、黄色粘土と続く。地山であるところの黄色粘土と褐色土は明瞭な判別が困難であるが、褐色土



第6図 Y—a区遺構図



第7図 Y—b区道構図

層内に割れた円錐を含んでおり、積土である可能性が強い。また橙褐色土上面から深さ25cm前後のピットが2穴掘りこんであり、深さは深いもので60cmをはかる。ピット間の距離は2mである。

#### b トレンチ

宅地の東側通路の部分に設けたものである。トレンチ北半部は宅地造成の際の加工により原形を損っている。南半部についてみると、黄色粘土層から深さ20cm余りの不整形ピットが掘り込んであり、壁面に有機物が付着していた。このピットの性格、時期は不明であるが、少くとも上層の橙褐色土層は積土であることが確認できた。橙褐色土層からは3穴のピットが掘り込んであり、断面で検出した1穴は柱の抜き取り穴状の広がりをもつもので、中に瓦片1片を含んでいた。これらとaトレンチ検出のピットとはその間隔は異なるが、同一の建物の柱穴と考えてよさそうであろう。

#### c トレンチ

県道わきの宅地に設定したものだが、約10cmの厚さの表土の下はすぐ地山になっており、遺構等何ら検出できなかった。

これら3か所のトレンチ内での地山面の標高差は、cトレンチに比べ、a、bトレンチが約80cm低くなっている。このことから、a、bトレンチ内で検出した橙褐色土層は、基壇掘り込み地盤内の積土である可能性が考えられる。しかしS区でみられたような版築は認められず、また基壇の端も確認できなかつたために、規模、構造等は明らかにし得ないが、比較的深いピットの検出、宅地造成時の語、付近に点在する礫石等とも併せ考え、この周辺にS区の建物と一連の国分尼寺の主要伽藍が存在していたといふことが推定できる。

## 出土遺物

今回の発掘調査によって発見された遺物は、国分尼寺の中心部と考えられる建物の基壇から出土した古瓦がその大半を占める。以下軒丸瓦、軒平瓦およびその他の遺物について記述する。

#### 軒丸瓦

大別して2種類の軒丸瓦が出土している。第8図の1は、復原瓦当面径14cm、鼠色の堅緻な焼成で、径3cmあまりの内盛りを持つ中房に1+5の蓮子を入れ、周間に複弁七葉をめぐらし、外区には、支葉を伴う唐草文帯、珠文帯を配しているものである。2は、瓦当面径14.8cm、黄灰色軟質焼成で、内区には四葉座風の実線文をおき、外区内縁には、ハート形実線文を4つ配し、その間に唐草をめぐらした変形唐草文帯を持つ。また、外区外縁には、16個の珠文をめぐらし、周縁は平縁で、珠文帯との間に一重圓を設けている。

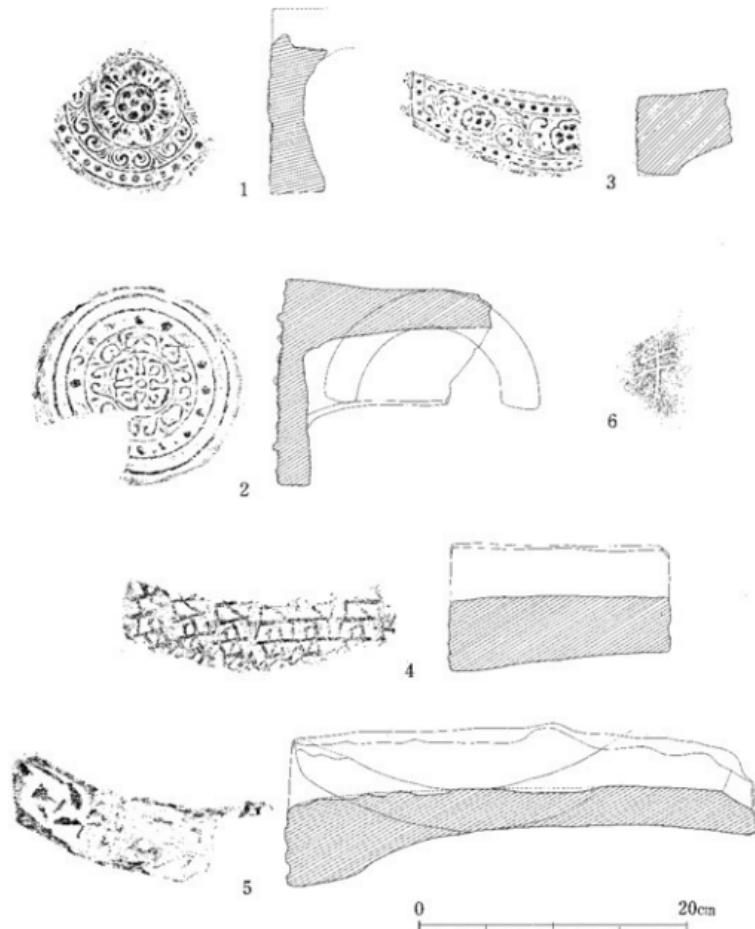
#### 軒平瓦

人別して3種類ある。第8図の3は、瓦当面の幅4.3~6cm、青灰色の硬質焼成で、内区には、陽刻で表現した四葉文3個をほぼ等間隔に併列し、その間に葉状唐草文で飾った優美なものである。外区には密な珠文帯が施され、周縁は平縁、頸は曲線彎である。4は、瓦当面全面に井桁状の文様を陽刻したもので、瓦当面の幅は5cmを測り、暗灰色を呈した軟質な焼成である。頸は直線彎である。5は、瓦当面

全面に不規則な文様を陽刻したもので、額は曲線額である。この瓦は、平瓦部がほぼ完全に残っている軒半瓦であるが、瓦当面の残存状況は、きわめて悪く一部しか文様が残っていない。

#### その他の遺物

軒瓦以外に、丸瓦、平瓦、鶴尾瓦の小破片、および須恵器等の遺物が出土している。丸瓦の中には、表面に「牛」を籠書きしたもの（第8図の6）が今回の調査で二例検出された。また、須恵器は、糸切り技法の手法を持つ壺、宝珠状のつまみを有する蓋等がある。



第8図 出土遺物実例図

## ま　　と　　め

調査は、今年が最終年度であったにもかかわらず推定寺域内のはとんどを宅地で占められていたため当初の目的を十分に達成することは出来なかった。ここでは調査結果をもとに若干の私見を加えてまとめてみたいと思う。

この遺跡は、前述のとおり南に出雲國府のおかれた意宇平野を望む緩斜面にある。ここで出雲國分僧寺との位置関係を考えてみると、僧寺（推定2町四方）の伽藍中軸線から、尼寺の推定中軸線まで、約3町半（375m）をはかり、またT、X区検出の築地状遺構は、國分僧寺の南を南北に走る天平古道の北端より北へ約半町（55m）行ったところにあたる。従って当時の条里にのっとって建立されたとみることができる。

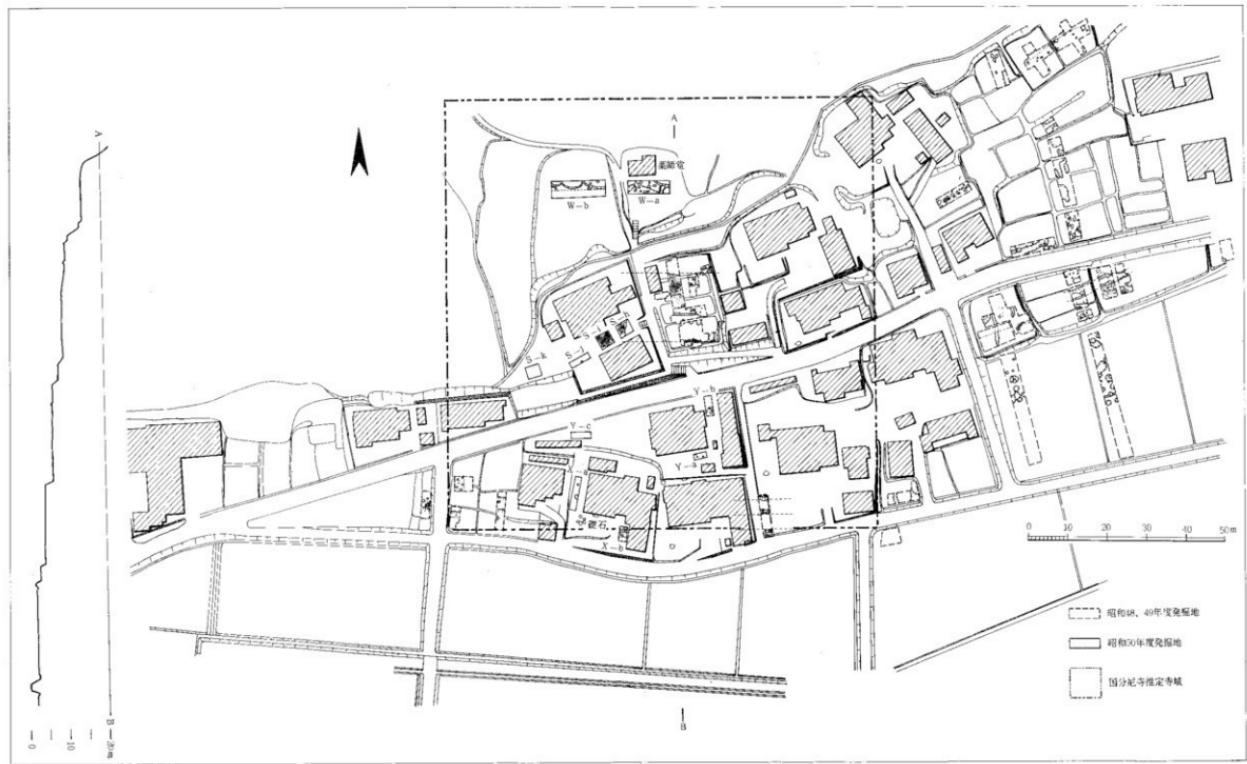
次に寺域については、一応1町四方を考えることができる。その根拠は、S区で検出した建物遺構を中心にして南北へ半町ずつとった時、北は薬師堂裏付近にあたり、南はT区およびX区の築地状遺構にあたるところから、南北の四至線をここに求めることができること。東西の四至線も同様にして考えた時、東はその付近で宅地の境界を示す石垣が全部折れ曲がっており、西は中竹矢の集落がのっている平坦地の西隣で、後背丘陵が南へ突き出してくる場所にあたること。の理由からである。

建物跡についてであるが、まずS区検出の礎石建物について、これの基壇は、掘込み地業を施し内部積上中に多量の瓦を含む特殊な状況であることが判明したが、その規模を仮に出雲國分僧寺金堂と比較すると、南北幅は國分僧寺の67尺（19.83m）に対して、尼寺は59尺（17.6m）、東西幅は108尺（32.96m）に対して尼寺は118尺（35m）以上となる。したがって國分僧寺金堂と比較した時、南北幅に対して東西幅が長すぎることが指摘できる。そこで昨年度確認した基壇積土において、北半部が瓦を多量に含んだものであったのに対して、南半部は厚さ5～10cmの土をつきかためた版築が行なわれていたという違いは、一応同一基壇内での違いと解釈していたものの、あるいは瓦を多量に含む北半部の解釈については訂正の必要があるかも知れない。いずれにしても、出雲國分僧寺の伽藍配置では、寺域の中心には金堂が建っており、尼寺も同様の性格をもつたものと考えることができる。しかし時代が下るにつれて、金堂と講堂を一つにした建物になってしまった可能性を考えることは、無謀にすぎるだろうか。

またY区検出の建物遺構は、調査区の関係で十分な調査は出来ず、そして上面は相当の削平をうけたが、掘込み地業を施した基壇をもつ建物の存在が考えられる。位置からすると中門にあたりそうだが、断定は避けたい。

尼房等の建物遺構の存在を想定して設定したW区からは、遺構は確認できなかった。しかし薬師堂を中心とした平垣面は後世の加工を受けているとはいえ、当時の姿とそう違わないものと判断でき、簡単な構造の建物の存在は否定できない。

かような点を総合した時、出雲國分尼寺のアウトラインが大体浮かんでくるが、いずれにしてもこれ以上の寺域内の調査は現状においては困難であり、今後は、西側に位置する瓦窯跡との関係等を明らかにすべく広汎な調査をする必要があることを痛感する。



第9図 出雲国分尼寺遺構全休図

1

遺跡遠景  
(意宇平野南端より)



国分寺

4.2 cm

国分尼寺

8.8 cm

2

遺跡近景  
(中央の入母屋造の家の周辺がS区、東南より)



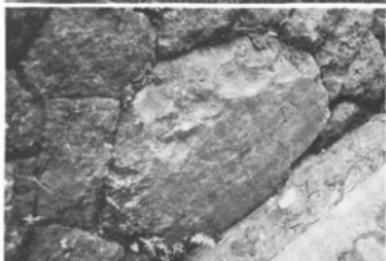
3

残存礫石  
(角田仁人氏宅庭)



4

石垣に転用されている礫石  
(菅井幹氏宅)



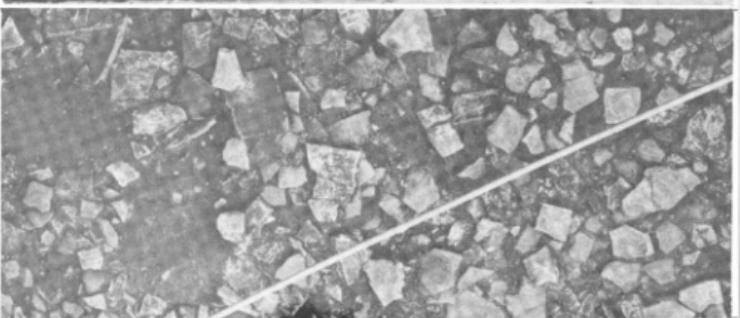
1

S-h 区  
暗褐色土中  
の瓦の遺存  
状況  
(南より)



2

S-i 区  
暗褐色土中  
の瓦の遺存  
状況

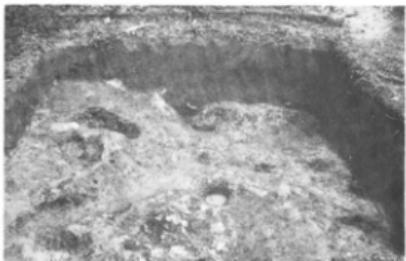


3

S-j 区 (東より)



4 S-k 区 地山の状況 (西より)

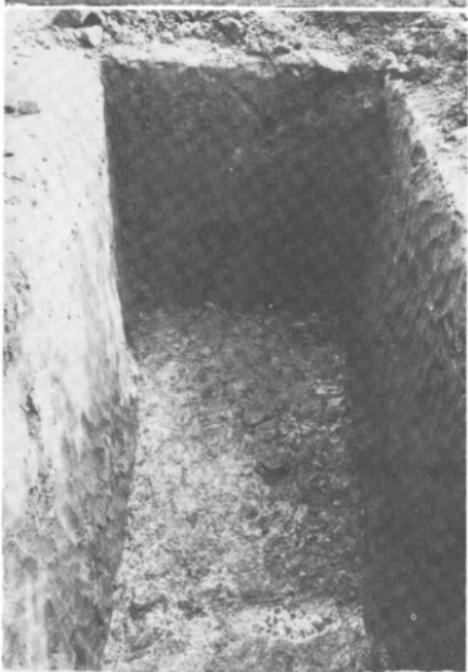




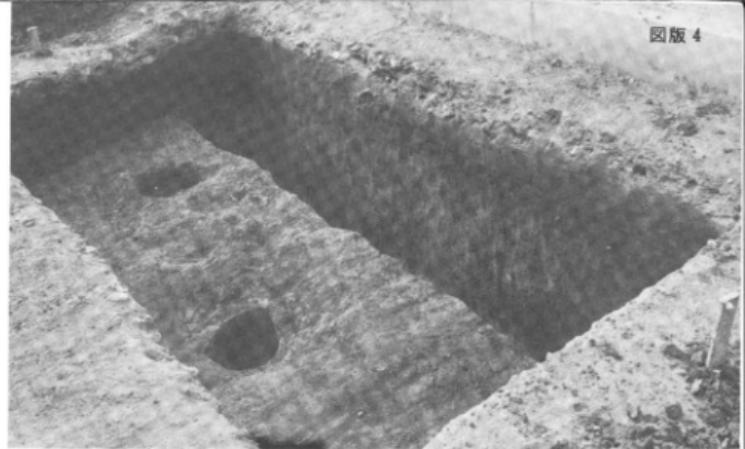
1 W-a 区 地山面の状況（東より）



2  
W-b 区  
暗褐色土下面の平坦面の状況  
(西半部は地山面、東より)



3  
X-b 区  
地山面の状況（南より）



1  
Y-a 区  
橙褐色土上面  
(左側の  
ピットは新  
しいもの、  
東西より)



2  
Y-b 区 (北より)



3  
Y-b 区  
南半部地山  
面の状況  
(東南より)

出雲国分尼寺  
第3次発掘調査概報  
昭和51年3月31日発行

編集・発行 島根県教育委員会  
松江市殿町1番地  
印 刷 株式会社報光社